「社長室のデスクはなぜこの向きなのか？」（B.M.豊田 著）外伝

『もし「ドラえもん」の、のび太みたいな男がこの本を読んだら』

ー２０分で理解できる！ショートサクセスストーリーー

□人生を変える本との出逢い

４月１日。
そうだ、今日はエイプリルフールだ。だからウソに違いない。
僕はマンガのようにほっぺたをつねってみた。が、やっぱり夢ではなかった。

僕は、本当に会社をリストラされたんだ。

出来なんて良くなかった。でも、大学を卒業して入社して、５年間真面目に勤めてきた。
不況なのは分かるけど、なぜキリのいい年度末じゃなくて、「新年度、がんばってスタートしよう」という年度初め、それもよりによって４月１日なんだろう。
いくらなんでもひど過ぎる。

とにかく、上司に呼び出されて通告され、紙切れ一枚で僕の人生はドン底に落ちた。

僕の名前は越智創太。
子どもの頃から、「落ちそうだ」なんてよくからかわれた。実際、今回のことで本当に底まで落ちてしまったけれど。
それより、**勉強もスポーツも苦手で、見た目もメガネをかけてて ドラえもん」ののび太に似てることから、そのまま ののび太」というあだ名で呼ばれたりしたこともあった。**

何だか人生がイヤになってきた。
もともと、「生きてて良かった」なんて思えるような幸せなことも、ほとんどなかったけど。

帰り道、僕はこれからどうしたらいいのか悩んで、呆然としながら歩いた。
とりあえず、仕事を探さないといけない。友達みんなにも、きっと笑われる。それとも、同情されるのかな？
何より、母さんになんて言おう。やっぱり泣くんだろうか。

僕の父さんは、僕が就職した年に病気で亡くなった。
結婚して、孫の顔を見せたりという親孝行が、結局できなかった。
それまで専業主婦だった母さんは、近くの小学校の用務員としてパートで働き始めた。父さんが亡くなったことや、慣れない仕事で、この数年はなんだか老けるのが早くなった気がする。

気がついたら、僕は本屋の前に来ていた。
ちょうどいいや。気分転換（現実逃避）に、ちょっとマンガでも立ち読みしてから帰ろう。
そう思って３０分ほどマンガや雑誌のコーナーにいたけど、何だか、あまり頭に入ってこ

なかった。そりゃそうだ。リストラされたばかりなんだから。

帰ろう。そう思って出口に向かった。

すると、いつもならまったく縁のない、字ばっかりの本のコーナーの、「ベストセラー」と書いてある棚が目に入った。

そこの一角に、横置きで10冊ぐらいまとめて置かれたところに目をやると、**今週のベストセラー第2位 ”人生を変える一冊”**と宣伝のプレートが付いてる本がある。

その本のタイトルは、**社長室のデスクはなぜこの向きなのか？**」。

”人生を変える一冊”というだけで、今の僕にとってすごく必要なのに、タイトルがやけに気になった。

社長室って響きがかっこいいな。

それに、「この向き」って一体どの向きなんだ？

思わず手にとって目次をさっと流し読みしてしまった。そして気づいたら、僕はその本を手に、レジに並んでいた。

□素直に実践～ 己を知る

家に帰って2階に上がった。ふすま戸を開けると僕の部屋だ。母さんはまだパートでいなかったから助かった。

僕は、部屋まで「のび太」にそっくりだった。

入って右に机があり、その前に窓。机の横の壁にはマンガの本棚。入って左は、布団なんかが入ってるふすま。いろんなモノで散らかってる部屋の真ん中には、昼寝用の座布団。

机に着き、さっき買った本の封を開けた。もう一度、まえがきや目次を読んでみた。やっぱり、何だか面白そうだ。

字ばっかりの本なんてほとんど読んだことがない僕が、読もうと思って買って帰ったことが信じられなかった。リストラされたことが自分の中であまりにも大きくて、なんとかして人生を変えなきゃと思ってるから、ワラをもつかむ思いだったんだな。

しかも、著者が全然無名なのもなんか親近感が湧く。

だって、**大成功している大企業の社長や会長が言うことだと、偉大過ぎてとても自分に当てはめられるなんて思えないもんな。たぶんこの人、そんなにスゴい人じゃなさそうだ。**

ゆっくり読み始めてみた。

なになに？ **自分の部屋が成功への基地になっていない理由**」か。

確かに、何だかいろいろ当たってるぞ。僕は子どもの頃からそうだ。

やりたくない宿題をしようと机に向かっても、まさに「のび太」状態。鉛筆を鼻と口の間にはさんで頬づえをついて、窓の外を眺めながら現実逃避の空想をして。

最後には、イスに座ってるのもイヤになって、何度も読んだようなマンガを本棚から出してきては、部屋の中央で、座布団を枕代わりにして読み始める。で、30分もしないうちにそのまま寝ちゃうんだよな。

ダラけオーラ」、 密室殺人」。ホント当たってる。

そして、僕は大切なものを失ってたんだ。その中でも特に、「時間」は大事だ。何しろ絶対に取り戻せないんだもんな。

何だか、怖くなってきた。このまんまの人生じゃ、僕はダメになる。いや、**こういう人生を子どもの頃から続けてきたから、今回もリストラされたんだ。**

何とかして、人生を変えたい。

そのために、だまされたと思ってこの本に書いてあることをやってみよう。もしだまされてたとしても、特に損もなさそうだし。

ええと、**部屋を書斎（基地）化して人生がみるみる変わるステップ**」か。

「書斎」というのは僕みたいな頭の悪いヤツにはなんか望みが高い気がするけど、「基地」ってカッコいいな。

とにかく、まずは机の向きを変えることか。小学一年生のときから、机はいつもこの窓を向いてた。何だか抵抗あるな。

でも、部屋が狭くなったとしてもやらなきゃ。

入り口に向けるのが一番いいみたいだけど、僕の部屋は入り口から見て横へ長い長方形だ。だから今の位置で真反対に向けるのが、部屋を一番広く見渡せるんじゃないかな。

今の机の位置で、窓を背にして、部屋全体を見渡せるように向きを反対にした。そして、一度イスに座ってみた。

おっと、「イス」じゃなくて「チェア」、「机」じゃなくて「デスク」だった。とにかく今は、書いてある通りにやってみよう。

この景色は、とても新鮮だぞ。

ふーん。置いてあるものとか、何もかも全然違うけど、**社長室って、確かにこんな感じかも。**社長さんのデスクが、窓の方を向いて、しかも入ってくる人に背中を向けてちゃおかしいもんな。

うん。確かに、部屋の中央でいつもダラダラして、最後にはうたた寝しちゃう自分の姿が想像できる。

そして、とにかく散らかってる。

この散らかり具合が、今の僕の人生の状態か。

ホントにそうだ。何が好きなのか、何がしたいのかさっぱり分かんないや。

それで、何回も読んだようなマンガや、スマホで見るサイトみたいな、受け身で意味のない情報に時間を取られてたんだな。

それでもって毎日のつまんない生活や仕事や上司に対してグチばっかり言って、結局自分からは何も改善しようとしてなかった。

デスクをこの向きにしてチェアに座り、部屋全体を眺めてただけで、なんだかいろんなことに気づいてきたぞ。

□自空間に革命を起こす

どんどん行こう。

次は、**デスク周辺を「聖域」**として、部屋のモノを全部廊下の方へ出しちゃうのか。ちょっと大変そうだな。まあ、いいか。時間はいくらでもあるんだから。

そして、本当にデスク以外のモノを全部部屋から出してみた。
こんなにモノがあったことにびっくりした。普段から掃除も模様替えもしないから、なんにもなくなった部屋を見るとすごく変な感じだ。
次は、書いてある通り、部屋全体の拭き掃除だ。この際だから徹底的にやってやろう。
天井も脚立を持ってきて拭いた。壁、窓、畳。

すごい。タオルもどんどん汚れて、バケツの水もすぐ真っ黒になって、何回も替えた。
なるほど、**部屋の垢というか、僕の人生のサビというか、なんだかいろんなイヤなものが取り除かれたような気がして、すごくスッキリする。**時間はかかったけど、やって良かったぞ。
今度は、外に出したモノをひとつひとつ、デスクで吟味して決裁する、か。
決裁」っていかにも社長みたいだ。いいね。
これは、ホント時間がかかりそうだ。懐かしいモノが出てきたり、捨てるかどうか迷っちゃうモノもあるし。

一時間も経たないうちに、気づいた。
確かに、かなり、いや、**ほとんどが 好きでもないモノ」や 意味のないモノ」 大事でないモノ」ばかりだ。**
これが、好きじゃないことをイヤイヤやり続ける生活によってたまったものなんだなあ。
確かに、**僕の人生はこういうものに埋められて、押しつぶされてきた**ような気がする。

ずっとあるマンガや雑誌も、もう処分しよう。もう何年も着てない服。いつか使うかも、って取っておいたもの。
全部捨ててしまおう。
そう考えると、ノッてきた。**なんだか、捨てるのが楽しくなってきたゾ。**
というより、要らないモノを捨てるのって、とっても気持ちいい。

そして、マンガや雑誌を捨てたことによって空いた本棚に、残すと決めたモノを置いていくことにした。
こうすれば、モノごとの定位置も決まるし、畳にモノを置かず、散らからなくてすむ。服や下着も、そこにきちんとたたんで積んでいくと、**なんだかショップのディスプレイみたいでカッコいい。**
なにしろ、残すことになった、自分のお気に入りの服ばかりだもんな。そんなに数はないけど。

全部の持ちモノの一部を、本の背表紙みたいに見えるようにするというのも新鮮だ。服でもなんでも、タンスや押入、引き出しなんかにしまうのが常識だと思ってた。
でもこうすると、どこに何があるのかすぐ分かるし、好きじゃないモノが視界にあるとイヤになって、捨てたくなる。
僕は、確かにこの部屋の社長なんだ。

作業中、つまらないメールが3件きたけど、どれも、ちゃんとデスクで見るようにした。
すると、広告みたいなメールにもいちいち開いて見入ることもなく、すぐに削除という判断ができて良かった。
あと、僕の部屋にはテレビもなく、喫煙の習慣がないということも、本当に良かった。

そうこうしているうちに夕暮れになり、母さんも帰ってきた。
ノッてきたから、作業中断するのは惜しい気もするけど、仕方ない。続きは夜にしよう。

□本来の自分に再会する時

意外だった。

僕がリストラされたことを知った母さんは、泣き出すか落ち込むかだと思って、僕はおそるおそる話を切り出した。けど、「そう。でも案外良かったんじゃない？創太、あの仕事合ってなさそうだったし。辞める勇気もたぶん出なかっただろうから、ちょうどよかったのかもね」というような内容のことを言われただけだった。

さらに、**これをチャンスだと思って、もっと僕に合った仕事を探した方がいい**というようなことも言ってくれた。

ありがたかった。

そうだ。僕は今、この本に出逢って、何かが変わろうとしている。きっと、その気持ちに報いるようなことをしよう。

結局、晩ごはんを食べてすぐ部屋に戻り、お風呂にも入らず徹夜で作業を続けた。もう明け方だ。

でも、おかげで完了した。

ゴミ袋にして１８袋、マンガや雑誌、学生時代の教科書類をひもで縛ったものが２０束。ほかにも、粗大ゴミとして捨てなきゃいけない、古いタンスや電気カーペットみたいな電化製品なんかもある。

これだけのモノがどこにしまってあったんだろうと思える量だ。

１階で寝ている母さんを起こさないように静かに、１時間ほどかけてすべての”ゴミ”をすぐ近くの収集ステーションに出した。ステーションがこんなに近くにあることに、初めて心から感謝した。

僕は疲れ果てて、自分の部屋に入ると布団の入った押入に上がり、そのまま眠りに落ちた。もう着替える気力も、布団を敷く力も残ってなかった。

眠る直前、「押入は真っ暗だからちょうどいいな。でも、これじゃまるでドラえもんだ」と思った。

起きたのは、ちょうどお昼の１２時。あまりにおなかがすいて、目が覚めた。

真っ暗な押入から出たときには、真昼の強い太陽でなかなか目が開かなかった。

でも、目が慣れたとき、**僕はすごく晴れやかな気分になった。**

新しい僕の部屋、いや、僕の書斎が目の前にある。書斎は、基地であり、社長室だ。

ほとんど何にもモノがなくなったきれいな空間。

その窓側に、デスクとチェアのセットがひとつ、こっち向きに置いてある。そして壁につけて設置した本棚には、気に入っている服をコンパクトにたたみ、積んである。他は、時計や財布などの、必要不可欠なものをきちんと並べて置いた。

そして、デスクでモノをひとつひとつ吟味して決裁していった結果、僕にとっての「好き

なもの」「大事なもの」が明らかになった。

ひとつは、エアーガンだ。これは、プラスチック製の小さな弾丸を込めて、空気の力で発射するおもちゃの銃だ。

おもちゃといっても少し上等なモノで、大学生（もちろん三流の私大）のとき、アルバイトしたお金で買った。ガンベルトと一緒になったものが2セットある。

勉強もスポーツもダメで、歌も絵も、とにかくほとんど取り得のない僕が、唯一、ひとより少し才能があるのが、この射的だった。

子どものとき、お祭りの屋台で分かった。狙った景品に、かなりの確率で当てられた。

父さんも母さんも、「すごいぞ」とほめてくれて、周りの大人のお客さんも、「上手い」「あの子すごい」とはやしたてた。

思えば、人からほめられたり騒がれたりした、数少ない経験の中の最初だったんじゃないかな。

それから、おもちゃのピストルを買ってもらい、部屋で空き箱や空き缶を立てて的にして、練習もした時期もあった。

上達するとさらに面白くて、ガンベルトに差しておき、西部劇のガンマンみたいにサッと抜いて早く撃つということも練習した。

思えば、この得意なことも「のび太」と同じだな。いや、僕はあやとりなんて出来ないから、のび太の方が上か。

こうやって、子どもの頃から今までのことを思い出してみると、**僕はこのピストルによる射的、早撃ちをしているときが一番夢中になれた。**

もともと、「的に当てる」みたいなことが好きなんだと思う。ダーツなんかも好きだし、大学では弓道サークルだった（もちろん、中学・高校では、運動はダメだから何の部活にも入ってない）。

でも、弓道も、的を狙ってるときにはすごく神経が集中して気持ちいいんだけど、なんといっても力がなくて（弓を引くにはすごく力がいる）うまく弓を固定できず、思ったところには矢を放てなかった。

そこへきてピストルだと、ほとんど力が要らない。むしろ余計な力はジャマで、集中して素早くピストルを抜き、正確に撃つことさえできれば、**力も年齢差も、男女も関係ない。僕みたいなのでも、人より優ることができた。**

結局、どんなに好きで得意なことを夢中になってしていても、小・中・高、そして大学を問わず学生のときには、「そんなことはいいからまずは苦手な（嫌いな）勉強を克服しなさい」となって、そういう時間は奪われてしまい、いつしかそれを好きだったことも忘れてしまってたな。

でも今回、こうして自分の部屋、いや、自分の人生を発掘してみて、あらためて僕はエアーガンによる射的や早撃ちが好きだということが分かった。

もうひとつは、好きな女性だ。

アルバムを整理したり、要らない写真なんかを捨てていく過程で明らかになった。

さやかちゃん。

小・中・高と同じ学校に通った同級生で、可愛くて頭も良く、ずっとクラスの人気者だっ

た。
まさしく、「ドラえもん」で言えばしずかちゃん。
そして、僕が唯一、「のび太」に勝てるところといったら、さやかちゃんと高校3年生のときにつき合ったことだ。

ずっと好きだったけど、まさかつき合えるなんて思ってなかった。
きっかけは、クラスメート達がひやかしのような感じで、僕がさやかちゃんのことを好きだという気持ちを見抜いてはやしたて、教室中でコールしたことだ。
そして、信じられなかったけど、さやかちゃんも僕のことを好きだと言ってくれた。
結局は、**僕の主体性と積極性のないことをきっかけにしてつき合えることになり、半年後、同じ理由で終わることになった。**

「創太さんは、本当に純粋で優しい人。そんなところが好きだけど、あなたが私のことを本当に好きでいてくれているのか分からない。不安なの」そう言って、さやかちゃんは僕から去った。
それ以来、僕は誰のことも好きになれなかった。何だか、怖かったんだ。

そして今回、デスクの向きを変えて部屋と、今までの人生の整理をしていく中でよく分かった。
やっぱり、僕はさやかちゃんを今でも好きなんだ。
そして、もっと自分に自信をつけて、今度は僕自身が、僕の言葉で好きだと伝えたい。
棚に飾った写真を見ながら、そう誓った。

ステキな笑顔のさやかちゃん。その横に、照れながらモジモジしてる僕がいる。
高3の、文化祭準備を一緒にしてる僕らを、クラスメートが撮ってくれた一枚だった。

□ 好きなこと」を夢にする

この本によれば、僕は「幸せな人生を生きるための必要十分条件」のかけらを見つけてようなものだ。
考えてみれば、しばらく、**好きでもない仕事」をイヤイヤやるために会社へ行き、起きてる時間の大半をそこで費やすなんてことをしなくていい**んだ。
これだけで、かなり気分は晴れやかだ。これからは、本当に好きなことをしてみよう。
僕は、棚に置いていたエアーガンを手にした。ガンベルトも、腰に巻いた。気持ちが引き締まってくる。

1階から、お菓子なんかの空き箱をいっぱいとってきて、部屋の端っこに並べた。僕はデスク側に立った。
蘇ってくるこの緊張感。そして快感。神経が研ぎ澄まされてくるのが分かる。
知らないうちに、僕は口元が笑っていた。
次の瞬間、僕はベルトからガンを抜き、連続で5発撃った。
全部、きれいに命中して倒れた。

それからどれぐらい時間が経っただろう。
僕は菓子箱をもっとたくさん並べて、何度も、早く正確に撃つ練習をした。箱も、遠くに置いたり近くに置いたりと、いろんなシチュエーションを試してみた。

腕は、にぶっていない。それでも、もっと早くガンが抜けるようになりたいと思った。
それで、体勢、手を動かす軌道、引き金の引き方、いろんな工夫をしてみた。

固定したモノを撃つ練習の次には、天井からヒモを何本かぶら下げて箱に結び、動いている的を撃つ練習もした。もちろん、格段に難しかった。

さらには、モノでなく、対”人”だとどうなるかのシミュレーションもしてみた。数メートル離れたところに、全く同じ装備の相手が立っていて、合図と同時にガンを抜き、相手の心臓の位置を狙って撃つ。

まるで西部劇のガンマン同士の決闘みたいだ。装備をきちんとしたもので作って、レーザー照射かなんかのセンサーで判定、みたいにすれば、ちょっとした競技になるかもしれない。

やっぱり、**好きなことについて考え始めると、アイディアが無限に出てくる。**
仕事のときには、どんなに考えても企画書一枚作ることができなかったのに、不思議だ。
たとえ作っても、上司に「何だこりゃ。ボツ」と言われて終了、だったもんな。

僕は、あらためてデスクに着いた。手帳を取り出して広げてみた。

会社に勤めるようになってから、なんとなく毎年手帳は買って持ってたけど、ほとんど活用なんてしてなかった。一ヶ月や一年後の夢や目標どころか、僕は今日一日のスケジュール管理さえできてなかったんだ。
でも、この本にある通り、未来に達成したいこと、なりたい状態を書いてみよう。書くのは自由だもんな。

五年、十年後なんて、遠すぎる。かといって一ヶ月後では、まだほとんど何もできてない気がする。
だから、**やっぱり一番いいのは「1年後の僕」だ。ちょうど新年度が始まったばかり。来年の4月1日には、まったく違う状況、まったく新しい自分でいたい。**

手帳の、表紙をめくって最初のページに僕の夢を書いた。
部屋にあるモノをひとつずつデスクで決裁し、大量の要らないモノを捨て、自分の中にある大切なものを再発見するという工程を経たあとだったからなんだろう。自分でも不思議なくらい、すぐに思いついた。

1 ”ガンマン道”を確立し、普及させる。また、その道を志す人たちが、エアーガンを通じて集中力や人間性を高めていくことをサポートする。

2 宮本さやかちゃんと結婚し、幸せにする。

1は、できればこのことを仕事にしたいと思った。もちろん、具体的なことは何も考えてない。
でも、やればやるほど、これは奥深く、素晴らしいものだと思うようになってきた。

まず、的を正確に撃つという集中力が鍛えられる。
次に、対人の早撃ち式の試合ともなれば最初に礼儀作法を取り入れ、その後は正々堂々とお互いの技の優劣を競う。
一瞬で勝負が決まる点では、武士の居合いのような緊迫感があるし、さらに良いところは、

男女差、年齢差、力の差なんてものがほとんど影響しない点だ。
小学生の女の子が、20代の、筋肉隆々の男性に勝つことだって大いにあり得る。
日本の「武士道」と、西洋の「騎士道」を融合させたような、新しい競技ができるかもしれない。
それを”ガンマン道”と名付け、無理なく少しずつ普及させていきたいと、本気で思った。

2つ目は、書いたそのままの夢だ。
僕が本気で好きなのはさやかちゃんだ。結局、ずっとそうだったんだ。
もう、完全に気づいた。
今度こそ、受け身でも、まわりからの働きかけでもなく、自分からストレートに気持ちを伝えるんだ。

僕は手帳の、夢を書いたそのページにさやかちゃんの写真も貼りつけた。

□好きなことを中心にした生活が生み出すドラマ

4月3日。
昨日は、自分の夢を手帳に書いた後、部屋でずっと早撃ちの練習をした。**本当に、好きなことをやってると、時間が経つのも忘れてしまう。**
そこで今日は、エアーガンを持って外に出た。いつまでも部屋にこもっていては、何も始まらない。

公園に来た。
小学生ぐらいの子ども達がけっこういる。まだ春休みなんだな。
僕は、ゴミ箱から空き缶を6コ拝借し、広場のベンチの上に並べた。
そこから5メートル離れたところに立った。

2丁拳銃。腰に巻いたガンベルトに差していた。
深呼吸をひとつして、エアーガン両方に手を添えた。
次の瞬間、ガンを素早く抜き、同時に3発ずつ撃ち、外側から連続で缶を倒した。

遠くから、「あの人すごーい」という子どもの声が聞こえたと思ったら、たちまち7、8人の小学生の男女に囲まれてしまった。かと思ったら、「もう一回」のコールが沸き起こり、逃げられなくなった。

何だか照れくさいけど、しょうがない。僕はもう一度、空き缶を6つセットして、さっきの位置に立った。
「もっと倒してー」と言いながら、男の子がひとり、なんと缶をもう4つ持ってきて、一緒に並べてしまった。合計10個だ。
さらに、何の騒ぎかと、遠くにいた大人達もぞろぞろ集まってきた。ちょっとした人だかりになってしまってる。
ええい、もう、やるしかないや。

僕は、目を閉じた。そして、ゆっくりと、深呼吸をひとつした。
2丁拳銃に手をかける。
普段の僕なら、何ひとつ大したことはできないし、ましてやこんな大勢の人に囲まれて注目されたら、ますますあがって何もできなかっただろう。

でも、これは 大好きなこと」だ。
やってるだけで気持ちが落ち着き、静かにワクワクできる。
家での長時間の練習も、苦にならなかった。腕はサビついておらず、むしろ昨日研いだんだ。

気持ちが充実した。
そして自然に、両手が動いた。銃声（といってもプラスチック弾だけど）にして5発鳴ると、缶はさっきと同じように2個ずつ、外側から連続して全部倒れた。

取り囲んでいた人達が、一斉に歓声をあげた。子ども達が駆け寄ってくる。
僕は照れながらも歓声に応え、同時にホッとしていた。

6月も終わろうとしていた。
僕は、ある衛生放送番組の収録スタジオにいる。『街角の達人』を、その技とともに紹介するといったコーナーに出演してくれというのだ。

あの日、公園での騒ぎがおさまってから、ひとりの男性が僕に近づいてきて、名刺を差し出した。
なんでもその人は、お年寄りの介護なんかをする入所施設の主任さんで、そこの施設で毎週やっているレクリエーションで、今の技を披露して欲しいと言ってきた。
時間はいくらでもあるし、僕のすることで誰かが喜んでくれるのならと、ふたつ返事で引き受けた。

そして、お年寄りにウケるだろうと、西部劇のように早撃ちガンマンとして紹介された。
やってることは同じだが、施設の人が調達してくれた西部劇のような衣装をまとい、空き缶をいくつも倒して喝采を受けた。ご丁寧にカウボーイハットやブーツまであった。
また、お年寄りの人達に順番に、エアーガンを持ってもらい、近くの空き缶を撃ち落としてもらうというのも、評判が良かった。新鮮な体験だったらしく、そして当たったときの快感が格別で、われ先にとエアーガンを取り合っていた。
施設の人にも、**「良いリハビリになるかもしれない」**と真剣に言われ、かなり好評だった。

それから、そういった施設の人達の会合みたいな場で、施設長が僕の話題を出したらしい。
そして違う施設からいくつも同様の話がきて、今では週に2～3回、いろんな施設を回るようになった。謝礼ももらえる。決して多くの額ではないが、母さんに渡す食費ぐらいにはなっていた。
何より、僕のしていることで多くの人が喜んでくれるというのが嬉しかった。

それで、今回の話だ。
噂が噂を呼び、いろんな人づたいでとうとう、衛星放送とはいえ、テレビ局までやってきてしまった。

あれからも、ずっと練習は欠かさなかった。むしろ、毎日長時間、真剣に、いろんなケースを想定して練習した。やっぱり、好きなことをしているときは、疲れない。「練習」という意識もなかった。
僕は、上達している。

最初は、いつもの通りエアーガンによる射的だ。的は１０個。
普段するように、僕は目を閉じ、ひとつ深呼吸をした。

目を開けたと同時に2丁拳銃を抜き、以前よりも早いタイムで、すべてを倒した。
スタッフの人達の拍手があがった。
収録番組だから、たぶんオンエアのときには編集でいろんな角度からのリプレイや、スローモーションもあるはずだ。そうするとカッコいいかも。

でも、これは軽いデモンストレーションのようなもので、メインは次らしい。

担当の人が、衣装や道具を持ってきた。なんと、本格的なウエスタン・スタイルだ。
しかも、それだけじゃない。心臓の位置につけるプロテクターのようなものもある。
聞けば、電子センサーが内蔵されていて、ガンから放たれる光線を関知するらしい。
つまり、エアーガンでなく、電子ガンだ。ちゃんとそれが2組用意されていた。
さらに驚いたのは、そのプロテクターのセンサーを双方リセットすると、ちゃんと相互情報交換が行われていて、先に相手のガンの光線が当たると、「バーン」という音とともにセンサーが赤く点滅するようになっていたことだ。
これなら安全に、そして判定も正しくできて、立派な競技になる。
僕は相手が誰だとか、勝敗がどうとかは一瞬忘れて、ワクワクした。

対戦相手は、3人。
一人目がＡＤの若い男性。二人目が、少し知名度のあるお笑い芸人の男性。最後が、的当てということで、アーチェリーの元オリンピック選手の男性だった。

ルールは、二人が5メートルの距離をとって立ち、お互い電子ガンに手を触れない状態で待つ。
不意にかけられるスタートの合図とともにガンを抜き、相手の心臓の位置につけられたセンサー入りプロテクターを狙って撃つ。先に相手のセンサーを光らせた方が勝ち。
競技の間、両足を浮かせてはいけない。体をねじってもいけない。撃てる回数は2回。

僕は、勝敗はいいから早く試してみたくてうずうずしていた。
練習しながらいろんな状況をイメージし、**こんなものがあればいいなと思っていたものがここにある。**いや、僕が考えていたのよりも性能が上だ。見た目もカッコいい。

あっという間に、3試合が終わった。
勝負にならなかった。僕も、そんなに簡単には負けないだろうと思っていたが、それどころじゃなく、失礼だけど、3人とも相手にならなかった。
よく考えると当然だ。僕はここのところ、こればっかり練習してるんだから。

僕がモノ足りなさを感じていると、プロデューサーが寄ってきて言った。
「せっかく面白い企画だし、画（え）的にもいい感じなのに、あっけなかったね。越智君がこんなにスゴいとは思わなかったから、何か物足りない感じで、ゴメンね。この企画、ちょっとの期間、シリーズものにしようと思うんだけど、毎週この時間空いてる？もっと強そうな人探して、少しずつレベルアップさせていくからさ。当然ギャラも出すよ」

もちろん、望むところだ。僕の方からお願いしたいぐらいだったから、心底嬉しかった。
自分がワクワクするようなことをさせてもらって、その上お金までもらえるなんて。
そして僕は頼み込んで、一回分のギャラを現物支給、つまりこの早撃ちガンマンセットを

いただくことを了承してもらった。もちろんウエスタンの衣装まではいらない。

家に向かう道で、ここ数週間の、不思議な縁でつながっていった出来事を思い出していた。

確かに、あの本を買って帰ってから確実に人生が変わり始めている。

いや、もうここまででもずいぶん変わった。やっぱり、**デスクの向きとともに僕の意識と運命の方向も180。転換したんだ。**

家に着き、最近の習慣としてすぐにデスクに向かう。そして持ちモノ全部を一度出し、ここでもひとつひとつ吟味しながら大半は捨て、意味のあるモノは残し、定位置に戻している。

この習慣で、本当に部屋、いや書斎が散らからなくなった。むしろ、最初に整理した日からまた徐々に要らないモノが見えてきて、少しずつ捨ててるから、さらにスッキリしている。

ただ、今日はいつもと違った。デスクに着こうとすると、一枚のハガキがデスクの上に置いてあるのが見えた。

盆に開催するという、中学校の同窓会案内だった。

□夢を、熱く公言する

新しい生活に、新しいリズムができはじめていた。

お年寄りの入所施設への訪問も完全に軌道に乗り、またひとつ訪問する施設が加わった。

テレビ局でもらった早撃ちガンマンセットを使って、比較的ＡＤＬの高いお年寄りに西部劇の決闘を疑似体験してもらうという試みも、とても好評だ。

テレビ番組も、衛生放送ながら順調で、特にガンマン対決コーナーになると少しながら視聴率が上がるんだそうだ。

そして、僕も好きなことでは負けたくなかった。だから練習も怠らず、対戦相手のレベルが上がってきても、まだ余裕を残して勝てた。

そこで、番組のコンセプトとしては**「絶対王者”越智創太を倒すのは誰だ」**をあおり文句にして、挑戦者を募集し始めていた。

そしてもうひとつ。

家での、書斎」という自分だけの時間と空間での”考える”習慣に加えて、”本を読む”という、今までの僕からは想像もできない習慣により、僕の生活は変わってきた。

あの本を読んで、**本というのはこんなに面白くて、人にこんなに影響を与えるのか」**と思った。

だから、あれから毎日書店に寄っている。

行くたびに買うというわけではないが、背表紙を眺めながら歩いたり、気になった本は手にとって目次やまえがきを読んだりと、それだけでも楽しく、勉強になった。

何だか、頭の中で考えることや、その言語も、少し高尚なものになった気がする。

同窓会は、迷ったけれど「出席」の返事を出した。

今の、リストラされて定職に就いていない僕を、皆はどう思うだろうか。最初は、恥ずかしい気がした。

しかし、きちんとした会社勤めとはいえ、好きでもない仕事をイヤな思いをしながらする毎日。上司や得意先に文句や嫌味を言われながらも、愛想笑いと我慢を重ねて自分を押し殺していく毎日。

そこから脱却して、今の僕は（安定した収入はないけど）自分の好きなことを仕事にしな

がら、毎日をイキイキと過ごしている。

恥ずかしいなんてことはない。むしろ胸を張って堂々としていよう。

そして、もし誰かに今の仕事のことを訊かれたら、僕がしていることの素晴らしさを、自信を持って説明しよう。

そう決心した。

あっという間に盆になり、同窓会の日がやってきた。

会場に着いて、少しホッとした。

テーブルやイスの、少しカタい感じだったら何となく入りづらいなと思っていたけど、居酒屋の中の座敷の広間ひとつ貸し切りという形で、意外とざっくばらんで落ち着けるかもしれない。

何人かの懐かしい面々と、よお、という感じで再会して少し話した。

でも、僕の目はやっぱり、さやかちゃんを探していた。

「よお、創太」。肩をたたかれた。

振り返ると、タカシの大きな体があった。子どもの頃からのガキ大将で、よくいじめられたもんだ。

隣には、家が資産家で金持ちの宗雄（ムネオ）。確か税理士になったはずだ。

その隣には、秀歳（ヒデトシ）。名前の通りの秀才で、今は弁護士だった。

小学校・中学校と、大体いつも一緒に遊んだ。笑ってしまうけれど、僕がのび太なら、まさしく、ジャイアン、スネ夫、出来杉だ。

やっぱり、同級生はいい。気をつかうこともなく、久しぶりに会っても、昨日の夕方、教室で別れたばかりかのように笑って話し合える。

不思議と、仕事のことは訊かれなかった。

考えてみると、「前の仕事は、リストラされた」なんてことを誰かに言ったわけじゃないんだから、当たり前か。今まで通り、さえない毎日を送ってると思われてるんだろう。

「創太さん」。後ろから声をかけられ、振り向いた。振り返る必要もないぐらい、誰の声かは分かってる。誰の声を忘れても、このきれいな声は忘れるはずがない。

「さやかちゃん。久しぶり。元気？」なるべく平静をよそおって、（ひきつった顔で）微笑んでみた。

やっぱり、相変わらず、いや、ますます、キレイだ。

「創太さんも元気そうね。仕事はどう？彼女はできた？」

そう訊かれて、彼女なんているわけもないのに、仕事のことと同時に言われたもんだから、慌てた。

「彼女なんて（君以外）いるわけないじゃないか！　仕事（ではまだないけど）は、今はとってもステキなことをやって、毎日イキイキ過ごしてるんだ」

…と、言いたかったのに、結局、「あ、いや…。それが…」と、はっきりしないうちに、さやかちゃんは女友達が再会を喜びながら連れていってしまった。

僕はなんてダメなんだ。こういうところを直さなきゃ、いつまでたってもこのまんまだ。

落ち込んでるうちに、開会になった。中学校、３年３組の同級生４０人のところ、約３０人が集まった。上出来だろう。盆だからこそだ。

発起人兼幹事の宗雄が挨拶をして、秀歳が乾杯の音頭をとった。

税理士と弁護士。立派な職業の２人が仕切って、カッコ良く見えた。

お互いビールを注ぎながら、昔話に花が咲いた。みんな楽しそうだ。そんな光景を見ながら、僕もなんだか幸せな気分になっていた。

急に、タカシが立ち上がって叫んだ。

「みんな、盛り上がってるなか悪いけどさ。こうやってただ飲んでるだかじゃつまんねえし、ひとりずつ、立って近況報告をしようや」

みんな賛同した。

まいったな。大勢の前で話をするのって苦手なんだけどな。

言い出しっぺのタカシからスタートした。

高校を卒業して、近くの運送会社に就職したことは知っていた。でも、１年前に辞めたらしい。初めて知った。

なんでも、力仕事が向いてると思って入った会社だけど、ここ2、3年は **何かが違う。もっとしたいことがあるような気がする」**という気持ちになり、今はやりたいことを探しながらフリーター生活を送っているんだそうだ。

宗雄は、親が資産家だったこともあり、金銭的な苦労もせず、私立大学を卒業して税理士になった。ふつうの子どもと違って、宗雄は父親から長い間経済や金融、そして投資の教育を受けてきたらしい。現在は独立して税理士事務所を開いている。最後は少し自慢話のようになっていた。

秀歳はとにかく成績優秀だったから、これも苦労せず、都内の有名私立大を卒業。法学部だったこともあり、ストレートに司法試験に合格、弁護士になった。

他は、結婚して子どもが４人もいる者、２回離婚した者、大病して長い入院生活を送ったという者、今の職場や上司に不満があって爆発しそうだという者、本当に人生は様々だ。

さやかちゃんの番になった。僕は、全身が耳になって聞き入った。

さやかちゃんは、となりの県の国立大学の教育学部に入り、小学校の先生を目指していた。

でも、その道を志す道半ばで **私が本当にしたいことはこれじゃない気がする」**と、教員にはならずに卒業。しばらくその県でＯＬをしていたが、職場で知り合った男性とつき合うようになった。

やがて結婚をほのめかす発言をその彼氏がするようになり、ここでもまた **何かが違う気がする」**と、彼氏と別れ、職場も辞めて、１ヶ月前に実家に帰ってきたというのだ。

いろんな想いが入り乱れ、しばらく呆然となった。

あのしっかり者のさやかちゃんでも、自分の道をうまく進むことができずにいた。**本当の自分は何が好きで、何を心からしたいのか、多くの人にとって、それは深刻で大切な問題なんだ。**

何より、さやかちゃんに結婚するかもしれなかったほどの彼氏がいた。何だかショックで、でも、今はひとりだということに安心したりもした。

そして、そんな体験をすべてこの同窓会の場で発表したということにも驚いた。もう、頭

の中がいろんな思考でグチャグチャだ。

隣にいた人が、僕の体をつかんでゆすった。何だか、名前も呼ばれてるぞ。

気がつくと、みんなが僕の方を見ていた。あれこれ考えてる間に、僕の順番がきていたのだ。

僕は謝りながら立った。まいったな。完全に、全員こっちを見てるぞ。もっと食べたり飲んだりしながら聞いてくれたらいいのに。

「よっ！有名人！」誰かが言った。

「なんだよ。なんで創太が有名人なんだ？あいつ、何かやらかしたのか？」タカシが訊くと、そいつはわざわざ大きな声で説明した。

「みんな知らないのか？オレは観たぜ。創太のヤツ、今衛生放送でやってる番組の人気コーナーの『早撃ちガンマン対決』で、ずっと連勝中でさ。『絶対王者』なんて言われてて、挑戦者があとを絶たないんだよ。銃を持ったときのあいつは別人だぜ。速えーのなんの。びっくりしたよ」と、ガンマンのジェスチャーつきだ。

へえー、あいつ、スゴいんだというような感じの目つきで、あらためてみんなの視線が僕に集中した。

「そ、そうなんだ。たまたまの、不思議な縁でさ。さ、最初は、僕にそんなのできるわけないって思ってたんだけど、ね」

いかんいかん。なんだかビクビクしちゃってるぞ。ちゃんと、最初から順を追って話そう。

僕は、４月１日に会社をリストラされたこと。ある本に出逢って価値観が変わり、自分にとって大好きなこと（人）を再発見したこと。その、好きなエアーガンを練習する中で、いろんな縁とチャンスをいただくようになって、テレビまで出演させてもらいながら、わずかばかりの収入を得始めたことを話した。みんな静かに、真剣に聞いてくれていた。

だから、今の僕は、収入は少ないかもしれないけど、毎日がとても充実していて楽しいんだ。心から好きで、いくらやってても飽きないことをワクワクしながら続けられるだけでも幸せなのに、そのことでお金までもらえる。こんなことがあるんだ、って思ったよ。しかも、僕が楽しんでやってることを、喜んで観てくれてる人達がいる。そして、その人達が元気になる。自分で言うのもあつかましいけど、こんなステキな仕事はないって思えるんだ」

なんだか、調子にのってきた。僕は、自分がこんなに堂々と人前で話せることに驚いていた。

そして、何か胸が熱くなってきた。

「でも、それだけじゃないんだ。僕の考える”ガンマン道”は、自分でガンを握って体験したとき、もっとその人を元気にできるんだよ。例えば、今お邪魔してる高齢者向けの福祉施設では、お年寄りに電子ガンを握ってもらって、的を狙って撃つということを体験してもらってる。これは、手と神経のリハビリになると思うんだ。何より、的に当たったときの、あのお年寄り達の嬉しそうな顔。見てるこっちが感激しちゃうよ。

そして、子ども達にとっては、礼儀作法と集中力を養うのに抜群の効果があると確信してる。相手と向かい合い、ガンを構えて『どちらがより速いか、どちらがより正確か』を競う。この緊張感はたまらないよ。そんな、武士や騎士のような決闘を彷彿とさせるから、自然に礼節も養われていくんだ。

僕はこの”ガンマン道”を少しでも多くの人に知ってもらい、そして体験してもらって、楽しみながら成長できるものにしたいんだ。

それが僕のライフワークだと信じてる」

夢中になって語っていた。
みんな、シーンとなっている。中には、ポカーンと口を開けているのもいた。しまった。熱くなり過ぎて、みんな引いちゃったんだ。

次の瞬間、３０人の、大拍手が巻き起こった。
今度は、僕が呆然としてしまった。みんなが笑顔で僕の話を讃えてくれる中、僕は顔を真っ赤にして照れながらも、すごく嬉しかった。

帰ったのは深夜だった。夜中だろうと、お酒を飲んでいようと、僕はデスクに着いて持ちモノを整理し、手帳を広げた。もう、自動的な習慣になっている。
今日という日を振り返ってみた。あの大拍手の後、僕は大勢に囲まれ、
「スゴイな、創太」「胸にジーンときちゃった」「オレも、自分の人生を見直したいと、ずっと思ってたんだ」「その夢、実現するといいね。応援してる」「オレも、その本読んでみたい」「〝ガンマン道〟、絶対いいよ。広まるよ」
と、口々に言われた。僕は、すごく感激した。

何人かと2次会に行き、盛り上がった。
みんなの今の生活や仕事に対する、憤りや違和感。実は子どもの頃から、こんなことがしてみたかった等、いろんな話が聞けた。
僕は、今日という日に感謝した。そして、人前でスピーチすることの大事さを噛みしめた。

言葉は上手くなくとも、自分の熱い想いを語り、みんなに分かってもらう。そうすることによって、自分の中の考えも整理することができるんだと思った。

□仲間からの応援

もうひとつの収穫は、秀歳が提案と協力を申し出てくれたことだ。なんでも、僕の話に感動してくれたらしく、「創太君のその夢を実現させるためには、たとえひとりからでも会社を設立し、しかるべき収入を得るシステムを作り上げた方がいい」と言うのだ。
しかも、そのための法務上の手続きなども協力してくれるという。
難しいことはよく分からないから、まさに願ったり叶ったりだ。**やっぱり、持つべきものは友達だなあ。**
そのまま、秀歳の事務所を訪れる日も約束した。

デスクと手帳があれば、時間や空間だけでなく、思考も整理することができた。そして、思いついたアイディアや手段、そしてそれを行う日時も、手帳に書き込むことによって忘れることがない。
いや、忘れないわけじゃないな。むしろ、すぐに忘れる僕から言えば、**手帳に書き込むことによって、安心して忘れることができる**』と言った方がいいだろう。
少し興奮気味でなかなか寝つけないかと思ったけど、天性の寝つきの良さと、酔ってることもあり、いつも通りすぐにぐっすりと眠った。

盆も明け、一週間ほど経った日の午後、僕はカフェにいた。タカシと宗雄に「話があるから」と呼び出されたのだ。

といっても、よく僕はここのカフェを使っていて、待ち合わせの1時間前からもう来ていた。あの本の通り、外出先での書斎としてよく利用するのだ。

確かに**奥の席を、壁を背にして座ると、なんだか僕がこの空間をプロデュースしているかのような錯覚に陥り、とても気分が良かった。**

ほかのお客さんが入ってきて楽しそうにおしゃべりするのを見ながら手帳のスケジュールを管理したり、創業者の伝記、経営の本などを読んでいると幸せな気分になれた。

コーヒー代を払ってるのではなく、空調の効いた空間で過ごさせてもらえる時間を買っているというのも良く分かる。しかもここは2階でガラス張りだから、景色代も含まれている。

時間通りにふたりがやって来た。

まず、宗雄の話はこうだった。

「僕も、あの日の創太の話にはすごく感動した。で、率直に言わせてもらうと、”出資”させてもらいたいんだよ」

僕は耳を疑った。出資だって？

「セコいこと言ってると思われるかもしれないけど、創太の夢は、きちんとやれば儲かると思うんだよ。いや、この言い方は良くないな。

すごく広がっていくビジネスだと思うんだ。今の子ども達にとっての礼儀や集中力を養うもの、そして、狙った通りの的に当たったときの快感。これは、普及するよ。

塾やちょっとしたスクール、いや、創太自身が”ガンマン道”と名付けるぐらいだから、**ひとつの道場を開設して、練習生を募集する**んだよ」

なるほどと思った。僕もおぼろげにイメージは湧いていたけど、具体的に言葉で言われて、自分の中に抱いていたものがはっきりした。

宗雄は、そのための場所を、お父さんが所有するビルのひとつのテナントを使用すればいいと言ってくれた。

もちろん家賃は発生するが、破格の値段だ。立地の良さから考えれば、タダみたいなものだ。

そして、出資者として、テレビ局が作ってくれた早撃ちガンマンセットとほぼ同等のものを、１００セット作ってくれるという。いや、その他の諸々の必要な経費や備品関係についても同じだった。

これは、僕もそうした方が良いらしいのだが、宗雄は僕の会社の「役員」として登録し、収益があがったならばその一部を「役員報酬」として受け取るのだそうだ。

まったく、企業や会社に関する法務・税務の知識は、秀歳と宗雄に任せるのが一番だ。

「**投資の本質は、これなんだよ。**多くの人が、「儲ける」手段として株だとかＦＸだとかに、曲がった知識で手を出し、短期の動きに一喜一憂してギャンブルにはまった人のように大損をしていく。

本当は違うんだ。**株式への投資は、自分がその企業の理念や業態に共感して応援するという証なんだ。**

そして、きちんとした企業なら、ゆっくりでもきちんと利益をあげて社会へ貢献していく。それは結果的に、「貯金」の利子よりもよっぽど大きい利益になるんだ。現在の日本の金利なんて、ないも同然だからね」

僕は、宗雄の案をありがたく頂戴した。

一方タカシは、意外なことを口にした。

「オレはよ。知っての通り、難しいことはよくわかんねえ。でも、創太の夢ってのが、す

げえってことはこの前わかったんだよ。
でさ、単刀直入に言うけど、オレを創太の会社で雇って欲しいんだ」

僕はびっくりした。あのタカシが？僕の会社の従業員だって？
「オレは今、３つのアルバイトをかけもつフリーターだけどよ、とにかく、夢とやりがいが欲しいんだよ。創太の夢に乗っかるってわけじゃねえ。でも聞いてて、オレの胸まで熱くなったのは確かだ。
役には立つぜ。練習生の勧誘や、道場の施錠管理や掃除。それに、今度から機材も増えるんだろ？そうしたらそれを運ぶ人手と、車が要る。オレのボロ中古車が活躍するってもんよ。
それにより、実はもう、アルバイト２つ辞めてきたんだ…」

言われてみれば、確かにそうだ。事業が拡大すると、どうしても人手がいる。
僕は、最初軌道に乗るまでは、安い給料しか出せないことを伝え、お互い握手をして別れた。

□広がる夢

１０月になり、僕はますます練習をするようになっていた。
何せ、もう僕の会社であり、正式な仕事なのだ。今までの入所施設への訪問やテレビ局での出演も、会社としての正式契約となり、きちんとした手続きによって支払われる「報酬」となっていた。
「顧客からの報酬や社員への給料、そして税金のことはちゃんとしといた方がいい。特に税金は、脱税とか節税とか、あまり考えない方がいいんだ。
税金というのは、社会において自分が事業をさせてもらい、儲けさせてもらったことへのお礼であり、社会へ還元する手段だ。だから、ケチらず払った方が、次からもお金が回ってくるもんだよ。何より、きちんと計算して堂々と払った方が、とても気持ちがいいんだ」という、宗雄の言葉が思い出された。

確かに、宗雄や秀歳の人脈のおかげで訪問先も増え、どうなるかと思われた道場開設も、順調に練習生が入会してくれて、現在は小学生を中心に４０名ほどいる。会費を安く設定したことも良かった。
ふたりが、法務・税務の面でウチの参謀のようなアドバイスをしてくれるので、そのへんの心配は何ひとつなかった。

代わりに、僕は自分のデスクで”ガンマン道”の今後の展開をゆっくり考えた。デスクといっても、昼間は会社のデスクだ。

もう少し練習生が増えて、それぞれが上達すれば、道場内での大会をやってみよう。それも、早撃ち・遠距離からの正確性など、いろんな部門が思いつく。
そして、武道と同じように昇級・昇段テストを設けるのだ。そうすれば、上級の子何人かををリーダーとして、小さい子の面倒とちょっとした指導を見させることができる。
何より、練習生全体のモチベーションが上がる。武道みたいに帯の色で級を表す、というわけにはいかないから、ガンマンのバッジというのはどうだろう。
いろんなイメージが膨らんだ。

そう考えていくと、今この会社に欠けているものも浮かび上がってきた。優秀な事務処理

能力が絶対的に必要だ。タカシは子ども達の面倒等、本当によくやってくれたが、僕同様、パソコンの扱いなどはダメだった。

席を立ち、窓の外を眺めた。４階からの眺めは、悪くなかった。

道場に、人が入ってくる音がした。ここは、エレベーターを降りてすぐが道場に入るドアで、その奥にこの事務室がある。

小学生が来る時間にしてはまだちょっと早いなと思いながら、道場に繋がるドアを開けると、うつむいたさやかちゃんが立っていた。

コーヒーを入れ、差し出すとさやかちゃんは小さな声で「ありがとう」と言った。そして、カップを持ち上げ、口をつけないうちにすぐに置き、立ち上がって言った。

「今日来たのは、私もここでお手伝いさせて欲しいというお願いのためなの」

驚いた。

タカシに続き、さやかちゃんまでがそんなことを言うとは。

「私、あの同窓会でも言ったように、自分が心から求めてるものが何か分からずに、なんだか毎日が楽しくなかったの。**ああ。いま私は、自分の人生を生きている』って思えることが、どうしても見つからないのよ。**だから、あの時創太さんが語った夢が、とてもまぶしく感じたわ。みんなもそうだったと思う。でもね、私にとっては、昔好きだった人が言った言葉だから、たぶんみんなよりも心に突き刺さったの」

僕は、複雑な心境だった。

さやかちゃんの口から出た「好き」という言葉ひとつに胸がキュンとしながらも、「昔」と「だった」がついていることで、シュンとなった。

それから、今のウチの事業内容、道場の概要とスケジュール、収入や支出なんかを説明した。

当然、さやかちゃんも人を何人も雇うことは出来ないことを分かっている。そこで、一日４時間のパートタイムということになった。

仕事上のパートナーとはいえ、一日の一部分をさやかちゃんと同じ空間で過ごせるということに心が躍った。ますます、いろんなことを頑張れそうだ。

２週間もすると、よく分かった。

以前、事務関係のＯＬだったさやかちゃんの仕事の質は高い。軽く、給料以上の仕事をしてくれている。

ウチのカッコいいロゴマークを考案し、それを生かしたステッカーや名刺まで作ってくれた。僕は新しく出逢った人にそれを出すのが誇らしかった。

さらには広報誌を月に一度発行することとし、それを僕らの同級生の、いろんな関連の場所に置いてもらうことになった。

練習生達も、きれいな女性が事務でいることに加えて、自分達の載った広報誌を見たりで、とても嬉しそうだ。

年が明けた頃には、練習生は１００名を超えた。

だから、今は少年部と大人の部を時間帯で分け、さらに曜日別に、月・木のグループと火・金のグループに分けるようにした。

忙しくはなったけど、やはり自分の好きなこと、望むところだ。

僕は、こうしてガンマン道が広がっていくことが純粋に嬉しかった。

子ども達を自分の方へ向かせ、分かりやすく説明・実演し、実践させるなんてことが、以前の僕からは考えられなかったが、これもまさに「好きなこと効果」だ。

ゆくゆくは、昇段者や高い級の大人を育てて支部道場を、なんてことも夢ではなくなってきた。

ガンマン道は、無限の可能性を秘めている。

□充実した日々を生きる喜び

2月も終わりに近づいた。

僕は、今のビジネスと暮らしにとても満足していた。

いや、「満足」なんて言い方は横柄かもしれない。幸せを感じている、というのが正しいだろう。

そして、このビジネスに関わってくれている、すべての人へ感謝しながら毎日を送っていた。

ビジネスパートナーとも呼べる友達、練習生、訪問先の人達、テレビ局の人達、また、こうして直に接している人達の背後にも、その人をサポートしている人が必ずいるのだ。

こう考えると、**社会や世の中は、みんなどこかで繋がっている。自分が卑怯なことや汚いことでお金を儲ければ、必ずまわりまわって因果応報が巡ってくる**ということが、感覚で理解できた。

この本にある「リネージ・パワー」というものの存在も、今の僕には痛いほど感じることができる。

社会やビジネスは横に、いろんな広がりや人脈や縁という形で続いていくのと同じように、縦に、つまり**時間軸としてこれまでその仕事や社会を発展させてきた先人達の偉大な功績があるのだ。**

そして当然、〝人〟こそ、横へのつながり以上に、縦（時間）で、悠久の歴史の中で連綿と続いてきた先祖からのつながりをもっている。

だから僕もこの本を読んでからは毎日朝夕、越智家の代々の先祖、そして父さんが見守ってくれている仏壇に手を合わせ、感謝の気持ちを伝えたり、いろんな報告をしている。

お陰で、本当に毎日が充実している。

母さんも、僕が好きな仕事をして元気に日々過ごしていることを、心から喜んでくれていた。

ビジネスにおける大成功、ではないかもしれない。

しかし、自分の大好きなことを仕事にして、大好きな人達に囲まれ、毎日を充実した気持ちで生きている。そしてそれが、不自由なく生活していくだけの収入を生み出している。

これが、成功でなくてなんなのだろう。

むしろ、家族や友人と過ごす時間はおろか、自分の自由な時間や心の平安のない「不幸せな大成功」に比べれば、まさに「幸せな成功」ではないか。

今日は休日だった。といっても、それは僕にとってのことで、平日だから会社は動いている。

今では、タカシともう二人の一般部の指導員が定期練習の面倒を見てくれるようになっていた。

こうして自由な時間を確保できるようになったこともひとつの、そして大きな財産だ。

母さんと一緒に、越智家の墓参りに来ていた。月に一度、日を決めて手帳にスケジュールし、必ず実行している。
墓石をキレイに磨き、花をお供えし、ローソクと線香に火を灯し、手を合わせた。

自分が今こうして存在させてもらっていること、健康に毎日を過ごさせてもらっていること、そして会社が順調に回っていることについて、報告と感謝をする。
すると、不思議というか当然というか、気持ちが晴れ晴れとし、翌日からまた元気に仕事に打ち込めるのだった。

お参りが終わり、立ち上がったとき母さんが言った。
「父さんはね、いつも創太のことを心配してたわ。
あなたは決して勉強ができる子でも、運動が得意な子でもなかった。だから、自分の給料は少なくても、大学だけは出してやりたいって。
それは、大卒の方が就職しやすいとかって考えたわけじゃなくて、4年間で選択肢を広げたり、いろんな人に出逢って社会の仕組みや人生観を学んで欲しかったらしいの。**『まだ20歳にもなってない高校生が、たった12年ふつうに学校に行ったからって、自分が何者で何をしたいかなんて分かるはずがない』**ってよく言ってたわ」

初耳だった。
父さんとは、子どもの頃からあまり「将来の夢」とか「こういう仕事がいい」とかいう話をしたことがない。母さんにはいろんなことで叱られたが、父さんにはあまり怒られたことがなかった。
「創太は、自分に似て勉強もスポーツもダメだ。でも、とにかく純粋で、心の優しい子だよ。だから、損得で動くのじゃなく、儲からなくても人のためになるような仕事をして欲しい、とも言ってたわ。
だから、あなたが大学卒業して就職したとき、それが好きな仕事なのか、やりがいを感じて入ったのか、心配して私に訊いたことがあったわ。自分で訊けばいいのにね」

僕は、僕の知らなかった父さんの一面、そして僕への想いを聞いて、自然に涙があふれた。
就職した会社は、**「なりたいもの」を探して見つけたのではなく、「なれるもの」を探して見つかっただけのものだった。うまくいくはずがない。**
で、結局リストラだ。父さんに申し訳なかった。

ただ、今は違う。やっと自分のライフワークを見つけ、多くの人達に喜んでもらいながら、自分の成長の糧としている。

もう一度墓前にしゃがみこみ、手を合わせて目を閉じた。
今なら、胸を張って父さんに言える。
「僕をこの世に送り出してくれてありがとう。父さんと母さんの子で本当に良かった。僕は今、とても幸せです」
2月の、まだ冷たいはずの風が微かに温かく、そしてわずかな春の匂いを運んできた。

帰り道の途中、母さんと別れた。ちょっと会社に寄ってから帰宅しようと思ったのだ。
時間帯としては、まだ練習生はおらず、タカシが道場の掃除や器材の整備をしているか、さやかちゃんが事務仕事をしているかのはずだった。

やはりタカシが道場にいた。
掃除はもう終わり、指導のために練習しているのだという。
事務室にさやかちゃんはいなかった。ボードのプレートを見ると、「外出・買出」とあった。何かの消耗品や飲料品を買いに行ったのだろう。

デスクに就いて、２つの書類に目を通した。一通目は何かの宣伝の書類。もう一通は、講演会の依頼だった。

□さらば、夢の日々よ

みんなで道場の事務室に集まった。
みんなとは僕、さやかちゃん、タカシ、宗雄、秀歳。そして道場一般部の男性である高橋さんと田中君の７人だ。
講演会は、この地域の商工会議所からの依頼だった。”ガンマン道”について、そしてウチの道場の活動について話して欲しいらしい。
やはり、いろんなところでこの道場の認知度は上がっているのだ。

「これはいいチャンスだよ。無料講演会というのは、地域の人にとって足を運びやすい。そして、この道場を知ってもらうのにちょうどいい」。
宗雄は少し興奮気味だ。そして、自分の顧客と培ってきたノウハウを教えてくれた。

受付や待合ホールでは、道場の紹介冊子や広報誌の歴代バックナンバーをズラリと置き、自由に取ってもらう。そしてそれらには、**『こちらの冊子をお知り合いにプレゼントしたいという方は、ご遠慮なく下記アドレスへ メールにてご注文下さい』**という一文をつける。
そうすると、どんどん広がり、ついでにウチに興味のある人達のメールアドレスを入手できて、以後の宣伝メールがほぼ無料でできるという。もちろん、ホールでは紹介の動画なんかも流す。
そして、その紹介冊子と「入会無料券」を入場者ひとりひとりに受付で手渡すのが、少々コストがかかってもやる価値があるらしい。

その際大事なのが、その入会無料券を２週間の「期間限定」にすること。**人は、興味をもったものでも、時間が経つとすぐにまた冷めてしまう。だから、期間を区切ってしまわないとなかなか行動をおこさない**んだそうだ。

なるほどと思った。宗雄はいろんな経験があるのだろう。
人は確かに、「無料」「期間限定」「特別限定色」「あなただけに」「先着１００名様」という言葉にめっぽう弱い。

役割分担も決まった。
さやかちゃんと秀歳が受付ホール担当。タカシと宗雄が、フロア周りとステージ袖で待機。高橋さんと田中君が駐車場や案内を引き受けてくれた。

問題は、講演者（僕）だ。うまくできるだろうか。
ただ、この仕事をするようになって、お年寄りの前でのパフォーマンス、子ども大人問わず練習生への説明・指導、何よりテレビへの出演などによって、大勢の前で何かを話して伝えるということが、苦ではなくなっていた。

しかも、自分でもよく分かってない商品の説明を得意先にプレゼンしろというのではない。自分の大好きなことについて話せというのだから、むしろ喜びではないか。

あの同窓会、みんなの前で熱くなって語ったことを、実際にやってきたことと一緒に伝えればいい。

そうだ。僕は実践してきたんだ。あのときの夢の途中経過に、僕はいる。

みんなも励ましてくれた。

「いいか創太。オレ達はな、お前の夢に共感、いや、ホレこんで集まってきたんだぞ。お前のその、**バカだけど純粋で、『みんなのために』っていう気持ちに賛同して人が集まり、輪が広がったんだ。**自信をもってやりゃいいんだよ」

タカシの言葉に、僕は涙をこらえきれなくなった。みんなも、微笑んで僕を見ている。

みんなの気持ちがひとつになった。

講演会の日がやってきた。

4月1日。日曜日。

奇しくも、僕がリストラされたあの日からちょうど1年だ。

そうだ。僕の人生は1年前、デスクの向きとともに方向転換し、激変したのだ。これまでやってきたこと、出逢った人々、いろんなことを思い出した。

朝の、仏壇へのお参りをした。

「ご先祖さま。そして父さん。行ってきます。見守ってて下さい」

会場の、会館ホールに早めに着き、みんなと最終打ち合わせをした。みんなテキパキと動いてくれた。

僕は、まだ誰もお客さんのいないホールの舞台に立ってみた。想像よりも、広い。満員で500人らしい。

「いい雰囲気よ、創太さん」

誰もいないと思ってた観客席から声がした。さやかちゃんだ。こちらへゆっくり歩いてくる。

「今日になるまで、そしてこの会場へ来るまで、いろんな緊張や心配があったけど、今日この場所に立ってみて、なにかが吹っ切れたよ」

「その意気よ。私、応援してるから」

「ありがとう。頑張るよ」

いつか、君につり合うようなちゃんとした男になりたい。

そして、以前の僕ではできなかった、自分に自信をもち、自分の行動や将来を自分の力で描き、進んでいくという力をもって、君にプロポーズしたいんだ。

あの本で言っている「人生を長い間止めている感情のブレーキ」は、僕にとっては間違いなく、“さやかちゃんに伝えていない好きだという気持ち”だ。

今日がそのひとつの転機となるようにしたい。

ついに開場となった。

続々お客さんが入ってくる。やはり無料の力は大きい。

よく見ると道場生やその保護者、さらには福祉施設の職員の人達や入所者の家族、テレビ

局の人達も来てくれていた。本当にありがたい。
他の、一般の来場者も、ホールにある展示物や道場紹介映像、そして広報誌にかなり見入ってくれていた。

ほぼ満員。約５００人が席に着いた。いよいよ開演だ。
主催した商工会議所の会頭が長めの挨拶をした後、僕を紹介、ついに出番になった。

ひとつ、大きく深呼吸をして、ステージ中央へ歩いた。みんな、大きな拍手で迎えてくれた。
もう、何も迷いはなかった。
「私は、ちょうど一年前の今日、５年間勤めた会社をリストラされました」
来場者が全員、えっ、という感じになった。
「エイプリルフールですから、最初はウソだと思いました。しかし、やはりウソでも夢でもなかったのです。私は、呆然としながら会社を後にしました」
そこから、偶然書店で運命の本に出逢ったこと、そこに書いてある通りにデスクを部屋を変え、自分にとって大事なものを再発見したこと、それをつきつめていくことにより、不思議な縁が広がったことなどを、順を追って話した。
客席側は照明が暗いが、全員が真剣に聞いてくれているのがよく分かる。

僕も、夢中になっていた。
あの同窓会のときのように、胸が熱くなった。
そして、多くの友達の協力と支えによって会社をもてたこと、道場を開設できたこと、すこしずつ練習生が集まってきて、今では２００人近くいることを話した。

「私達が行っている”ガンマン道”について、少しご説明します」
ここが、会社にとってのいわゆるマーケティングの肝となるところだった。ここをいかに伝えるかによって、ガンマン道の良さを理解してもらい、新しい顧客やビジネスの繋がりを生み出すかが決まる。

しかし、僕はここを、ごく普通に紹介するだけに留めた。
これまで話したことと、僕が心から伝えたいことを考えると、この宣伝じみた話は何か違うと感じたのだ。
だから、ストレス解消に良いこと、お年寄りにとっては脳と身体機能の良いリハビリテーションになること、子ども達には礼儀作法と集中力が養われることなどを、練習内容と昇級のシステム、競技内容を紹介することでイメージを掴んでもらった。

「そうです。私達のこのガンマン道が、世の中の様々な人にとってどれだけ素晴らしい効果を上げるかについて、今ここで理論だけお伝えしてもあまり意味はありません。
なぜなら、何事もまずは実践あるのみ。体感していただくのが一番だからです。どうぞ、いつでも道場へご連絡下さい。
そして、私が今日みなさんに『これだけは分かっていただきたい』と思うこと、それは、**あなたが心の底から好きなことを知る”本来のあなた”に再会し、その好きなことをとことんやること、そして、それによってイキイキと毎日を生きながら、良き友人やパートナー、仲間との輪を広げ、幸せに、心豊かに人生を謳歌する**ことなのです」

そうだ。僕が本当に伝えたいことは、これだったのだ。
「ですから、みなさんもぜひご自宅に帰られたら、一度時間をとってご自分の空間を見直してみて下さい。不要なモノを思い切って捨てていくことによって空間が整理されていくと、

時間も整理されていきます。
つまり、好きでもないコトや人に使う時間がどんどんなくなっていくのです。
このことによって得られる時間や精神的余裕は、何物にも代えがたい財産となるのです。
みなさんは、もっと好きなことをしていいのです。もちろん、「好き勝手なこと」ということではありません。「大好きでたまらないこと」です。
そして、**みなさんは、そのことによってもっともっと、幸せになっていいのです。今日から、ご自分でその許可をあげて下さい。**
私達大人が、そうして夢をもってワクワク何かをして生きる姿を見せることこそ、子ども達にとって最高の教育となるのではないでしょうか。
世界中の人が、それぞれ自分の大好きなことをして過ごせば、みんなが幸せなはずです。戦争なんてなくなるでしょう。
みなさん、どうか本来の自分を取り戻し、大っ好きなことをして生きましょう。
今日は、本当にありがとうございました」

お礼と同時に頭を下げると、場内が大きな拍手に包まれた。
中には立って拍手してくれる人もいる。と思ったら、つられて大勢の人が立ち始め、あっという間に場内全体がスタンディングオベイションとなった。
僕は、割れんばかりの大拍手に包まれ、深々と頭を下げた。
涙がフロアに落ちた。

最後のお客さんを見送った後、スタッフみんなで集まった。
総来場者数４８８人。その全員に紹介冊子を手渡した。手応えも良かったから、明日から問い合わせが殺到するかも、なんて冗談を言い合った。
みんなも興奮気味で、急遽、夜は打ち上げをすることが決まって解散となった。

僕は控え室を出た後、もう一度、誰もいなくなったホールにいた。今度は客席だ。
目を閉じ、今日の余韻を感じつつ、この一年間を思い出してみる。
本当にいろんなことがあった。でも、僕は大したことはしていない。好きなことを恥ずかし気もなく続けていただけだ。
そこへ、周囲の人達が共感してくれて、それぞれの人が自分の得意とすることを提供してくれた。

「ありがとう」。つぶやいていた。
支えてくれたみんな。そして僕を、この素晴らしい世の中に生み出してくれた両親、先祖。
あらゆることに感謝の気持ちがあふれてくる。

会館の出口に向かうとき、前方にさやかちゃんが見えた。最後の見回りや、会館の事務所の人へのお礼をしてくれていたのだろう。
「さやかちゃん」
思わず大きな声で呼び止め、走って追いついた。

僕と、結婚して欲しいんだ！」

僕は、講演の後ということもあり、気持ちが高鳴っていたのだ。自分でも何を言っているんだと思いながらも、口に出ていた。

「突然ゴメン。でも、学生の時さやかちゃんにフラれてからも、いや、**結局、子どもの頃から、僕はさやかちゃんだけがずっと、好きだったんだ。**
以前の僕は自分に自信が持てなくて、まわりに流されて、何の主体性もなかった。でも、今は違うんだ。自分の人生を、自分の正直な気持ちで生きている。
今の僕達は、あくまでもビジネスパートナーかもしれない。でも、これからはお互いの、人生のパートナーになりたいんだ。
僕と、結婚して下さい！」

今日プロポーズしようとか、こんなことを言おうなんて全く考えてはいなかった。
でも、どんどん気持ちがあふれてきて、それが言葉として、止まらず口から出ていた。

少し下向き加減だったさやかちゃんが顔を上げて、僕は驚いた。
明らかに、怒っている。
次の瞬間、僕の方へ一歩近づいたかと思うと、ビンタが飛んできた。頬を打ったその音は、待合ホールによく響いた。
そして、「創太さんなんてキライ！」と涙目で言い放ち、走り去った。
ホールの角を曲がって、すぐに姿が見えなくなった。

僕は、ビンタの痛みも忘れるほど、愕然とした。
当然だ。この一年、いろんな素晴らしいことがありすぎて、調子にのっていたんだ。
そして、今日のこともあり、僕は感動と興奮で、相手の気持ちや状況判断さえできなくなっていた。こちらがどんなに想っていても、相手もそうとは限らない。
すべてがうまくいくなんて、そんなに人生は甘くない。

そう思った瞬間、さやかちゃんが走って角を曲がり、こちらへすごい勢いで向かってきた。
僕は反射的に目をつむった。今度は反対の頬にビンタが飛んできた。
「創太さんのバカ！
今まで生きてきた中で、一番嬉しい言葉を聞くのが、何で今日なの！？何でここなの！？
自分で時間と空間の大事さを伝える人が、そんなことも分からないの！？」
さやかちゃんが叫んだ。

僕は、完全にうろたえていた。
「ど、どういうこと？ぼ、僕はただ…」
「もちろん、あなたは誠実な人だから、ウソじゃないってことは分かるわよ。でも、何もエイプリル・フールに言うことないじゃない！
それに、好きな人にこんなとこでプロポーズされた私の気持ちも考えてみてよ！」
さやかちゃんは、頭上のトイレのマークを指さしながら言った。

しまった。
僕はやっぱり気持ちが高鳴りすぎて、さやかちゃんを見つけた瞬間、そこがどこかも、今日がどういう日なのかも、まったくわからなくなったのだ。エイプリル・フールに、トイレの前でプロポーズ？
やっぱり僕は、相手の気持ちや状況判断ができない、最低な男だ。

でも待てよ。相手の気持ち？さやかちゃんは確かに、「嬉しい言葉」「好きな人に」と言ったぞ。
「ゴ、ゴメン。でも、じゃあ、まさか、さやかちゃんは僕のことを…」
勇気を出して訊いてみた。

「私も、創太さんのことはずっと好きよ。でもあのとき、私のことを好きだって言ってくれたわけじゃなく交際がスタートして、あなたの気持ちがずっと分からなくて、怖かった。だから、つき合ってる間もずっと、創太さんの本心から出てくる言葉や会話を求めてた。でも、ダメだった…」

さやかちゃんは、泣いていた。

「そうなんだ。あの頃は、本当にゴメンなさい。やっとその大事なことに気づいて、僕も変わることができたと思う。

…さやかちゃん。…プロポーズの返事を、教えてもらえますか？」

僕は、息を呑んで待った。

「…はい。…お願いします」

さやかちゃんは、恥ずかしそうに、うつむいて答えてくれた。

僕は、喜びで飛び上がりそうになったのだが、

「でも！ひとつ必ず約束して欲しいの」

急に怖い顔になり、僕の目をじっと見ながら言った。

「結婚式の日までに必ず、もっといい日に、もっといい場所で、ステキなプロポーズをして」

どんなことを言われるかと、カタくなっていた僕は、全身の力が抜けた。

「もちろんだよ、約束します！ありがとう！」

僕は、さやかちゃんを自分から抱きしめた。

こんなに幸せなことがあるだろうか。

両頬に、さっき叩かれた痛みが残ってはいるけれど、まさかこれは夢なんじゃないのか。

いや、そうだ、夢だった。長い間、僕の夢だった。

その夢は、ついに今、現実となったのだ。

著者：B.M.豊田

※転載・複製を禁じます。